

私学の魂

成蹊中学・高等学校

生徒への信頼をベースに多彩な教育を展開! グローバルな時代をリードする 「成蹊の人づくり」とは!?

小学生から大学生までが、吉祥寺の自然豊かなワンキャンパスで学ぶ成蹊学園。「知識に偏らない全人教育の学校を創りたい」という創立者の思いは、105年の月日を経た今も大切に受け継がれ、中高時代に自分の興味あることにとことん打ち込んだ生徒たちが、自身の価値観をもって各界に羽ばたいています。

同校の教育にブレがないのは、建学の精神である「個性の尊重」「品性の陶冶」^{とうや}「勤労の実践」が普遍であることにほかなりません。「グローバルな今の時代においても生きる指針になる」と、^{あとべ さやか}熱く語る校長の跡部清先生に、成蹊の確かな教育と人材育成について伺いました。



校長 跡部清先生

人づくりの基本は、信頼関係を築く力を身につけること

成蹊の教育はすべてが建学の精神に紐づいています。社会では、自分とは異なる考えを持つ人とも関わり、協力し合って暮らし、働かなければなりません（個性の尊重）。グローバルな時代に生きる子どもたちは、いかなる思想や国籍をもっている人たちからも信頼される人間性や国際性を身につけることも大切です（品性の陶冶）。さらに机の上の知識だけでなく、本物から学ぶことで価値観を磨き、人のために行動できる人間づくりを行う（勤労の実践）。それが成蹊のめざす教育です。

「どのような時代であっても人は一人では生きられません。他者と生きていく時に欠かせないのが信頼関係を築く力です。併せて生き方につながる価値観や、語学力を磨くことにより、子どもたちはグローバルな社会で自分らしく生きていくことができると考えて、私たちは“学校だからできること”を大切にしながら教育を行っています」（跡部先生）

成蹊だからできること1 「本物体験」で知的好奇心を刺激する。

成蹊には「やりたいことには手を挙げる」という文化が根づいています。秋に行われた文化祭の実行委員には、中高合わせて約400名（全生徒数1700名）が手を挙げました。その生徒全員を実行委員として行事の運営に携わらせるところが同校の懐の深いところです。先輩から代々引き継がれているマニュアルがあるとはいえ、これは組織を取り仕切る実行委員長への信頼がなければできないことです。言うまでもなく生徒は苦労しますが、今年も「個性的な仲間がさまざまな活動をする、その集合体が文化祭」という発想から生徒が作ったテーマ「一祭合彩」^{いっさいがっさい}にふさわしい文化祭が繰り広げられました。

「本校の文化祭は、クラス、部活、有志など、さまざまな団体が、それぞれ個性豊かなパフォーマンスを行います。一祭合彩というテーマは、その姿を見事に表現していました。文化祭なので当然楽しい催し物が中心ですが、中にはまじめな研究発表（有志）もあります。一昨年はクマムシ、昨年はダムの中和事業、イ



毎年秋に開催される蹊祭（文化祭）には留学生たちも参加。生徒自ら企画と運営を行います。

ワナの研究など、生徒自身が興味関心をもって自主的に取り組んでいる研究成果を発表する場にもなっています。特に今年の発表で印象に残ったのは、中3の4人組によるハンセン病の研究です。聴衆を前に40分間、原稿を見ないでプレゼンテーションを行いました。しかも時々質問を交えて、聴衆の反応を見ながらの進行は本当に立派でした」と跡部先生。研究のきっかけは、中2の「夏の学校」でハンセン病患者さんたちが暮らす施設を訪れたことのようにです。

「本校の体験学習は〈事前学習⇒体験学習⇒まとめの発表〉が1つのパッケージになっています。夏の学校でも、学内でハンセン病の勉強をし、実際に患者さんの話も聴きました。また、高校の生徒会でダイバーシティ（多様性）について活動をしている先輩たちからも話を聴き、重監房がいかにつらい場所だったかということも感じ取ったようです。彼女たちは中2の時点でも発表を行いました。そこで伝えきれなかった思いを力に、中3になっても研究を継続したのだと思います。今年の研究は、歴史からハンセン病を紐解いていました。私たちは、文化祭の研究発表の場に立つ生徒たちを、『小さな研究者』と呼んでいます。おもしろいな、不思議だなと思ったことを調べる生徒は大勢いますが、そこから一歩踏み込んで、さらに深い研究に取り組む姿勢が生まれるのは、本校が長い歴



理科では実験・観察を重視。“本物”に触れる機会が多いのが成蹊の魅力です。

史の中で築いてきた、風土によるところが大きいのではないのでしょうか」（跡部先生）

成蹊だからできること2 「多彩なメニュー×希望制」で 生徒の価値観を育む

夏の学校のように、成蹊には本物に触れる機会がたくさんあります。「本物に触れると、その時のイメージが子どもたちの“こころ”に残ります。それがその子の価値観を育み、生き方を選ぶ指針になると思うのです。そのため本校では、希望者参加型の企画を数多く用意しています。知的好奇心を刺激する学内の取り組みをSDGs（世界の未来を変えるための17の目標）に当てはめてみると、当てはまらないものはほとんどありませんでした」（跡部先生）

昨年度、実施・紹介した取り組みは全126企画。その他にも、生徒自ら校長室に企画書を持ち込み、プレゼンして実現したものもあるそうです。

「そういう機会があるたびに、生徒の豊かな発想に驚かされ、枠を決めてはいけないということを思い知らされます。もちろん企画の中には稚拙な部分もあるので、そこを指摘しながら、できるだけ意欲が行動につながるようにアドバイスしています。最近では、留

【2017年度実施の取り組み】

- ・ 高校生徒会チャリティーパート「街頭募金」
- ・ 2017年度文化祭「タンザニア 鉛筆を送ろうプロジェクト」（中学生有志）
- ・ 高校生徒会スクールダイバーシティパート「トークライブ」「上映会」「Blog」
- ・ 2017年度高校学習旅行 隠岐の島コース他「文化祭発表」
- ・ ラグビー部・水泳部・高校生徒会「吉祥寺清掃活動」
- ・ 高校生徒会震災復興パート「被災地調査活動」「復興支援展示・物産展」
- ・ 環境教育「ESD（持続可能な社会をつくるための教育）フォーラム開催」 など

トピック

学を経験した生徒が『(成蹊に来ている留学生に) 恩返しをしたい』とグループを立ち上げ、精力的に活動しています。留学生とのランチミーティングには、中学生にも声をかけ、参加を促しているようです」(跡部先生)

また、生徒の主体性を尊重する考え方は、高2の学習旅行にも表れています。同校では、全員で同じところに行く、一般的な修学旅行は実施していません。海外も含む複数の行き先から選択する方式を採用しています。

「行き先は教員が企画したものばかりでなく、生徒が独自の企画を立てて提案することもできます。今年はアルプス・黒部方面の企画を立てた生徒がいました。そのコースを希望する生徒が最少催行人数(20名)を上回ったので、提案した生徒たちが中心となって旅行会社と交渉し、企画を成立させました」(跡部先生)



高2で実施される「学習旅行」は少人数・希望者参加型の名物企画! 生徒と教員が一体となって立案を行います(写真は北海道学習旅行)

成蹊だからできること3 ワンキャンパスを生かした大学との連携

知的好奇心を刺激する場は、同じキャンパス内にある大学にも広がっています。「成蹊大学の先生が中3生のためにゼミを作ってくれました。3年目になりますが、年々参加する生徒が増えています」と跡部先生。今年度の中3は学年の約3割が参加。放課後の時間を活用して、積極的に参加しています。例えば生物学の教員のもとで、クローニング(ひとつの細胞からまったく同じ遺伝子を持つクローンを作成すること)を体験、経済学の教員のもとでは分析の仕方なども教えてもらえるそうです。「中3の秋は部活動が一段落して時間ができます。本校ではこの期間を高校0年生と位置づけ、進路のことを考えるタネ蒔きの時期としています。大学の先生は頭の柔らかい中学生と話をするのがおもしろいとおっしゃいます。一方の子どもたち



今年で3年目となる中3ゼミでは、成蹊大学の先生によるさまざまな講義が実現! 最先端の学問に生徒たちも興味津々です。

は純粋なので、最先端の学問のお手伝いができると喜んでいきます。関わる人すべてが『おもしろい』『楽しい』と言ってくれるので、今後この企画がどのような進化を遂げるのか、これからが本当に楽しみです」(跡部先生)

また、高校卒業後の進路については、「学びたいところで学ぶ」が同校の基本。学びたいものが成蹊大学にあれば成蹊大学、なければ別の大学を選びます。学年により異なりますが、内部進学率は例年20~25%。成蹊大学を志望した生徒は、科目等履修制度を利用して在学中に大学の授業が受けられる、併設校ならではの特典もあります。高3は週2日、午後の授業がない日を活用して、前期から受講することができます。要件を満たせば大学生と同じように単位が認定されるので、その分、大学で余裕ができます。その時間を活用して海外への留学期間に充てる生徒も多いそうです。一方の他大学受験をめざす生徒については「高校での学業に支障がなければ、成蹊大学への推薦資格を保持したまま他大学を受験できる制度があるので、その制度を使ってチャレンジする生徒も多いです」と跡部先生。実際、2017年度には東京大学に3名



2月に成蹊大学で行われたシンポジウム「オーロラと宇宙」では南極昭和基地とのライブ中継が実現! 成蹊には大学併設校ならではのメリットが数多くあります。

の現役合格（含 推薦入学 1 名）、他にも医学、国際、芸術など、さまざまな難関大学で合格者を輩出しています。

「海外の大学に進学する生徒も、30 年以上前から毎年コンスタントにいます。アカデミックアドバイザーが、アドバイスや書類の作成をサポートしてくれるので、これからますます成蹊高校から海外の大学へ進学する生徒が増えると思います」（跡部先生）

成蹊だからできること 4 国際教育は成蹊の DNA

「国際交流は成蹊の DNA」と跡部校長がいうように、同校には長きにわたり友好を育んできた海外の学校が複数あります。「アメリカのセントポールズ校とは約 70 年、オーストラリアのカウラ高校とは約 50 年のお付き合いになります。またアメリカのチョート・ローズマリー・ホール校、フィリッパ・エクセター・アカデミー校に続き、今年からデンマーク（ルンステッド高校）、スウェーデン（カルマーレ国際高校）の学校とも相互交流が始まりました。両校とも日本語コースのある私立学校なので、早くから留学生を受け入れることができました。生徒たちはこれまで経験したことのない北欧の文化に興味津々です」と跡部先生。

また同校では奨学金制度があり、長期・短期留学に関わらず、奨学金で参加できるプログラムも充実しています。2016 年度の海外留学実績は 115 名。受け入れ（1 年間、ターム、学校訪問）は 58 名。ほとんどの留学生が生徒のご家庭でホームステイをしながら、学校ではクラスに入って一緒に活動しています。

2016 年度にはスポーツでも海外の学校と交流がありました。ラグビー発祥の地、イギリス・ラグビー高校との交流です。「本校のキャンパス内で、ラグビー部と交流試合を行いました。本場の伝統ある学校との



早い時期から世界に目を向けた教育を実践してきた成蹊では、多彩な留学プログラムが充実しています（写真はケンブリッジ大学短期留学）

2018 年入試から 女子の定員を 5 名増

トピック

生徒の主体性を引き出し、価値観を育む成蹊中学校では、その教育をますます推進するために、2018 年入試から 1 回目の入試のみ女子の定員が **5 名**増加されます。

●第 1 回（2 月 1 日）

男子約 50 名→**約 45 名**、女子約 35 名→**約 40 名**

●第 2 回（2 月 4 日）

男子約 25 名、女子約 20 名 ※**昨年と変わらず**

共学校の中には男女別の定員を分けない学校もありますが、同校には男女のバランスを大切にしている理由があります。「共学校には男女が化学反応を起こしながらものごとを進められる良さがあります。学業ひとつとっても男子と女子とではタイプが異なります。女子は中 1 から 6 年間、こつこつと積み上げていきますが、男子は中 3 あたりから自分のタイミングでスイッチが入ります。その時に発するパワーに女子も刺激を受け、秘める力を発揮します。今回の募集人数の変更には、そういう化学反応をより多くの場所で見たいという意図があります」と跡部先生。そこにはいろいろなバックグラウンドを持つお子さんに入学していただき、互いに刺激し合える環境の中で価値観を育ててほしいと願う、同校の思いが込められているのです。

交流は生徒たちにもよい刺激となったようです。今年度はサッカー部がハワイの学校と交流する予定です」（跡部先生）

このように学校に居ながら海外の学生と気軽に触れ合えるのが成蹊の魅力。生徒たちは日々の学校生活の中で、国際感覚を養い、グローバルに活躍できる人材へと育てているのです。是非この国際性に満ちた環境を見に、同校に足を運んでみてください。



イギリス・ラグビー高校との交流ではラグビーの練習試合が実現！本場の選手たちを体感する貴重な経験となりました。